

# 特養におけるオムツを考える

## 一人ひとりに合わせた排泄ケア

社会福祉法人清郷会

特別養護老人ホーム九十九荘

介護福祉士

佐藤 由佳

介護福祉士

佐久間 正晃

# 先ず初めに「利用者から学んだこと」①

平成22年入所のY・Tさん

入所当初、ADL面においてほぼ自立されており

手先の器用なY・Tさんは針仕事が得意でよく昼食後、寮母室で他利用者の衣服の補修等をよくされていました。

そんなY・Tさんに平成24年悲劇が襲ったのです

転倒事故を起こしてしまったのです。

転倒後腰部の強い痛みを訴え病院に受診、

診断結果は「腰部の圧迫骨折」でした、それからのY・Tさんの生活は一変してしまいました・・・。

歩行器で自由に行動していた足は筋力が弱り、趣味の針仕事は手がしびれて上手くできず、排泄に関しても介護者の手を借りなければ出来ない状態になってしまったのです。

# 先ず初めに「利用者から学んだこと」②

そんな生活が一変最悪の方向に傾いてしまったY・Tさん

トイレでの排泄には強いこだわりがありました

腰部圧迫骨折の診断を受けているわけですから職員としては

職員「Y・Tさん痛いのが辛いだろうからオムツを装着しますからいいですよ」

職員「もしおしっこ出てしまったら直ぐに交換しますから」とお話しするも

Y・Tさん「こんなもんにするぐらいなら死んでしまった方がまだよ」

とオムツでの排泄に強い抵抗があったため、どこまで出来るか当初自信は

ありませんでしたが排尿や排便の訴えがあった場合Y・Tさんをトイレ誘導

することにしました。

# 先ず初めに「利用者から学んだこと」③

しかしここからが本当の闘いでした

もともと頻尿気味のY・Tさん約30分毎、時には5分程でナースコールが

また特に夜間帯訴えの多い時にはトイレに行った直後に「まだ出る気がするんですが」と一晩中排尿や排便の訴えを繰り返しそのたびに職員は腰部を痛がる

Y・Tさんのトイレ誘導を行いました。

ケース会議等でトイレ誘導することに疑問はあったにせよ、オムツに排尿・

排便よりも、何となく介護者としては「本人の意向ですし」介護者の感覚的に

「まあ～いいんじゃないか」と具体的な考えが出ないのが現状でした。

# 先ず初めに「利用者から学んだこと」④

日を追うごとにY・Tさんの訴えは多くなる一方

そのうちにはトイレ誘導を行っても出ていない5～15分毎のコールは鳴り響く状態

職員も限界を感じ始めてきました。

勿論Y・Tさんばかりを見ている訳ではありませんその他利用者からの訴えを無視

するわけにも行きません職員は大きな壁にぶつかりました。

それから

Y・Tさんを担当する私は考えました、どうしたらY・Tさんをこの苦しみから解放

することができるのだろうかと・・・。

# 先ず初めに「利用者から学んだこと」⑤

当初私たちの施設には排泄を考える委員会の存在はなく

排泄について考える場所はケース会議が主な場所でした、そのためケース会議で

検討した事項をY・Tさんに実行してきたのですがこれだけではなかなか直ぐに

手詰まりの状態になってしまい結果対処療法なので私は個人的にまずY・Tさんの

睡眠パターンや排尿、排便パターンを記録し表にしてみました

そうすることによりいろいろな事が見えてきました。

具体的に今なにが必要で何を調査すればいいのかが見えてきました。

# 先ず初めに「利用者から学んだこと」⑥

その後

Y・TさんのADLは日に日に低下し認知症も進行

しかし私を含めた全職員はY・Tさんがお亡くなりになるまでの約1年間

本人の意思を尊重しトイレでの排泄を諦めず行いました。

そしてY・Tさんが亡くなり気が付きました・・・。

「はたしてこれでよかったのだろうか？」

という大きな疑問だけが残りました。

# 排泄委員の立ち上げ

大きな疑問だけが残る結果に私はY・Tさんの「排泄介助」を行うという疑問  
このままY・Tさんから学んだ事を風化させてはいけない、また自分以外の職員も  
同様に疑問を持っている職員がいるのではないか？という思いから  
排泄委員の立ち上げを提案しました

Y・Tさんがお亡くなりになってから直ぐのことでした

そこで排泄委員立ち上げのもと職員から様々な意見を聞くことが出来ました

そして具体的な取り組みを話す場所が出来たので  
す。



# 私たちが先ず取り組んだ内容

①: 介護職員に対する聞き込み、意識調査

②: 排泄介助に対して待たせない方法

③: 排泄用具「オムツ」についての見直し

# ①介護職員に対する意識調査の取り組み

利用者A:「トイレに行きたいのですが・・・」

職員B:「あ～・・・ちょっと待ってて下さいまだ手が離せないんですよ  
これが終わったら行きますから待っててください」

1～2分経過・・・・・・・・・・。

利用者A:「あの～・・・トイレに行きたいのですが・・・」

職員B:「あ～・・・先ほど説明したように、まだ手が離せないんですよ  
これが終わったら行きますから待っててください」

排泄介助に行きたいのですがなかなか・・・。

日常どこかでこんな場面がありませんか？

①せっかくの排泄の意志があるのに待たせてしまう



②オムツや尿取パットに我慢できれず排泄



③オムツや尿取パットの交換が排泄介助

# 本当に今排泄介助が出来ないのか？

業務を遂行する上でどうしても業務の段取り  
流れが出来てしまいます。

例

食事介助 ⇒ 口腔ケア ⇒ 排泄介助



この一例の業務の流れは職員主体ではないだろうか・・・？

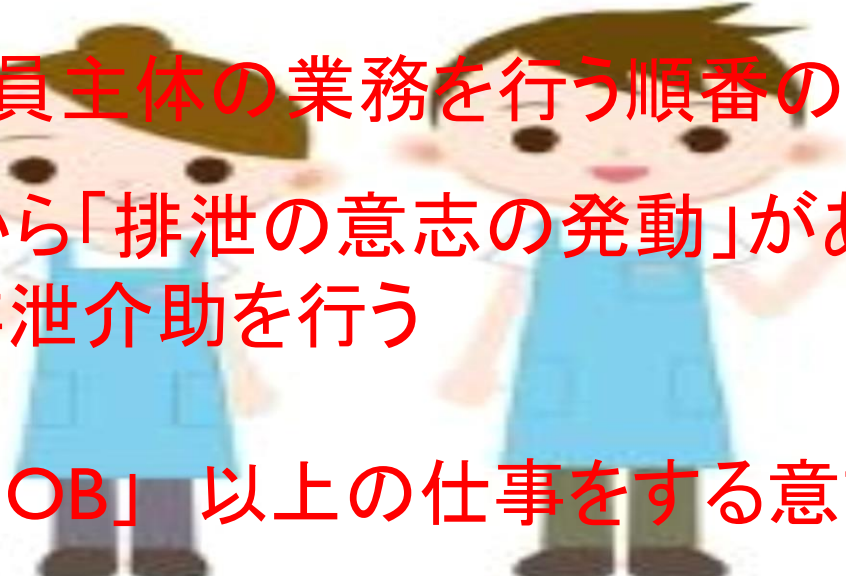
これを私たちはあたりまえの介護だと思っていないか？

## ② 待たせない排泄介助

待たせない排泄介助とはどのような方法か

私たちは「あたり前だと思っている介護」を壊すところから始めました。

# 「あたり前に思っていた介護」を見直す

- 
- 1・職員主体の業務を行う順番の解体
  - 2・利用者から「排泄の意志の発動」があった場合直ぐに排泄介助を行う
  - 3・「IWAY2JOB」以上の仕事をする意識

利用者に生命の危険がない限り  
排泄介助を優先させる。

# 1・職員主体の業務の解体

食事 ⇒ 口腔ケア ⇒ 排泄



食事 ⇒ 口腔ケア ⇒ 排泄



排泄 ↗

排泄 ↗

排泄 ↗

## 2・利用者から「排泄の意志の発動」

例えばよく目にする日常の出来事ですが

利用者の方々それぞれ食事のペースがあります

必ず一番最初に食べ終わる方が出るのは当然です、その方が

「トイレに行きたいのですが」と食事から排泄に移る瞬間に  
「もう少し待って下さい」と言うのではなく排泄の意志の発動に合わせて  
排泄介助に職員が対応するのです。

先頭の利用者に合わせ職員もそれに合わせて行動する。



## 3・1WAY2JOB以上の仕事をする意識①

意識調査、聞き込み調査で分かった内容としては排泄介助に直ぐに対応するためには時間がなかなか取れないのが現状だったので

1WAY2JOB(ワンウェイ・ツージョブ)以上の仕事をする意識をスローガンとして掲げました。

## 1WAY2JOB以上の仕事をする意識とは？

## 3・1WAY2JOB以上の仕事をする意識②

当たり前的事かもしれませんが一回の仕事に出たら

2つ以上の仕事をしてから戻ることを意識し達成する

そうすることで今までに無理だと感じていた時間が生まれる

例えばカレーを作るのにカレーを作り終えてからご飯を炊くのでは

食事までに大きな時間が必要ですが

カレーを作りながらご飯を炊いてしまえば食事を摂るまでに必要な

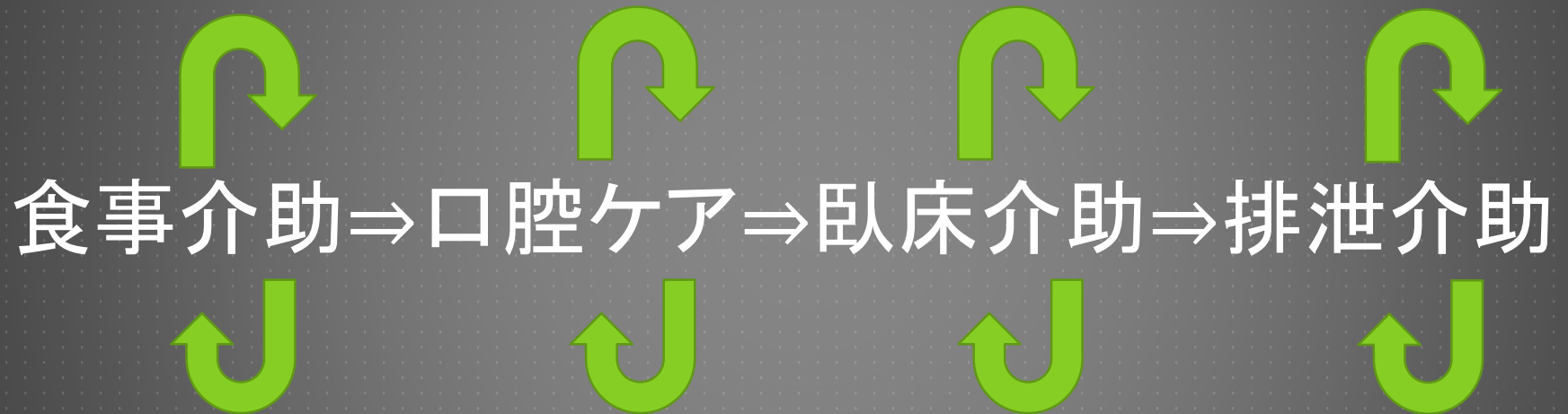
時間は大幅に短縮できるのではないのでしょうか？

日に何人体制で仕事をしているか

全員が「1WAY2JOB以上の仕事」を意識することで大きな時間が生まれました。

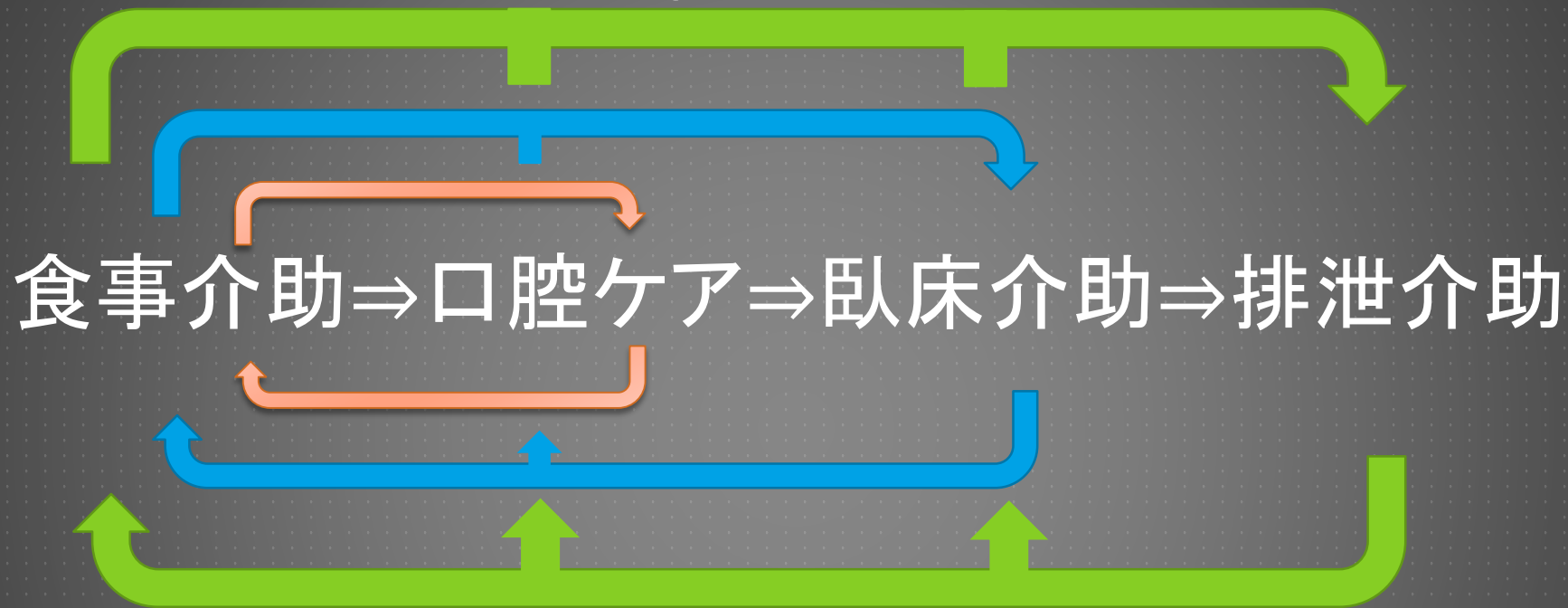
# 介護現場における具体的な 1WAY2JOB以上とは？

例



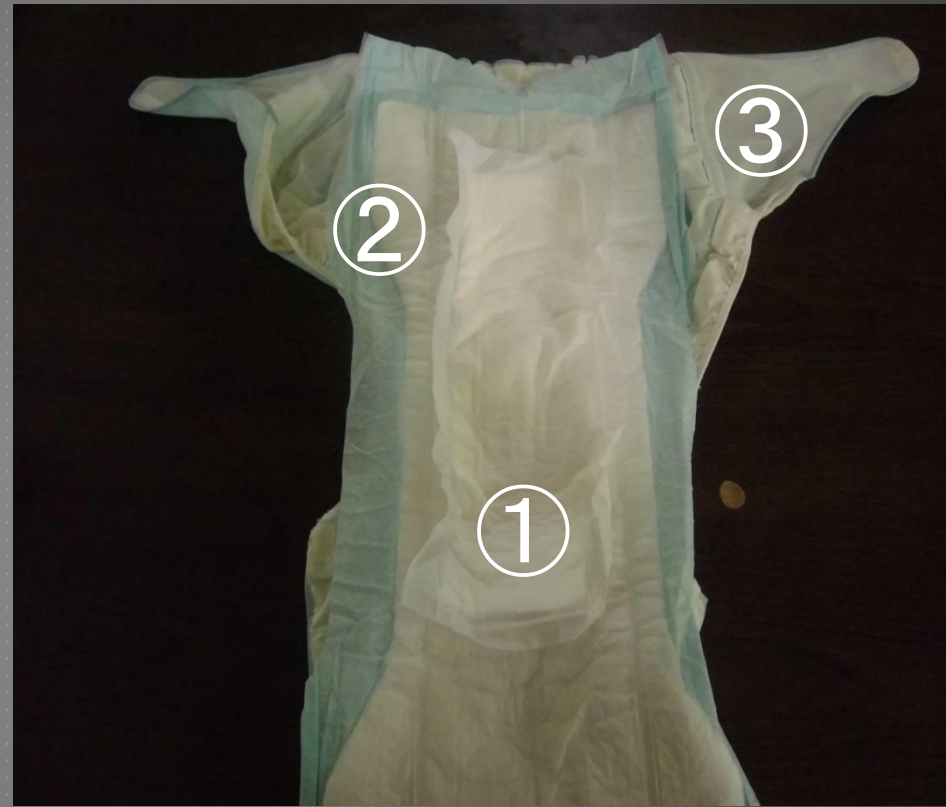
先頭の方を待たせてしまう

# 介護現場における具体的な 1WAY2JOB以上とは？



先頭の方に合わせる事で待たせない

### ③ オムツについての見直し 九十九荘で今まで使用していたオムツ



今まで当たり前前に何の疑問も抱かなかったオムツの使用。

# 今までのオムツの問題点

- ① 本人のプライドまた個人に対応できる用具を選択する配慮が全くされていなかった
- ② オムツカバーに通気性がなく蒸れやすい
- ③ 尿取パットの吸収量が少なく交換回数が(6回/日)これ以上減らせなかった
- ④ 尿、便漏れが多く見られた
- ⑤ 夜間(特に冬季)オムツ交換に対しての強い抵抗が見られた、交換後の不眠
- ⑥ 利用者から「すごく不快」と直接の意見(少量の排尿でも不快、交換の訴え)
- ⑦ カバーの劣化によるコスト、全体的に日に掛かる費用
- ⑧ 装着時の見た目の悪さ(オムツ使用が一目で分かってしまう)

### ③排泄用具「オムツ」の見直しについて

現状の使用しているオムツについて徹底的にミーティングを重ね見直しました。

そして何を目標としてオムツを変更するのかを考えました。

そして…。

#### 目標

- ①: 長時間対応することで夜間利用者の睡眠の確保
- ②: 現状使用しているおむつと比較しなるべく不快感のない物
- ③: 装着が簡易で双方(利用者・職員)に負担が少ない物
- ④: 現状のオムツにかかる費用のコストダウン
- ⑤: 見た目の改善

# 各社:「オムツ」「パット」製品の比較検証

## A社製品特徴

インナー吸収パットに種類があり尿の吸収速度が速くウエットバックが少なく、また全面通気シートにすることでオムツの蒸れを軽減させる製品が売りの特徴。



## 各社:「オムツ」「パット」製品の比較検証③

### B社製品特徴

オムツ・パットに弱酸性素材(吸収素材)を取り入れる事により皮膚トラブルの軽減  
長時間安心して使用していただける  
事が売りの特徴。

# A社製品 検証結果

- 1・今までいかに間違ったオムツの当て方をしていたかアドバイザーからの指導で理解することが出来た  
また尿量の多い方にオムツを重ね対応していたが無駄だという事が理解できた。
- 2・長時間つけている方からも違和感・掻痒感の訴えがきかれなかった
- 3・通気性が良く・肌触りが良かった
- 4・試用期間中に目立った皮膚トラブルは見られなかった
- 5・今まで使っていたものより質もよく、安く仕入れすることができた
- 6・使用したパットを触ってみたが、ウエットバックがなくサラサラだった

# B社製品 検証結果

- 1・肌に対してかぶれにくいとの事だったがこの期間にスキントラブルの方がいなかったなので検証出来ず、サンプル試用期間はトラブル見られず。
- 2・夜間交換回数を減らせる提案がなされなかった
- 3・通気性が良く・肌触りが良かった
- 4・装着は簡易的で丈夫な作りだったがその分厚みを感じた。
- 5・コスト的に条件に見合わなかった
- 6・今後スキントラブルの方が発生した場合使用の期待は持てた

# 各社：「オムツ」「パット」製品の検証結果

平成26年3月、各社の製品説明を受け、A・B社に要望という形でお話をさせていただくところから検証が始まり、今回の検証の結果A社製品のオムツ採用したが正直各社との話の中でこんなにもオムツ、パットという排泄用具が進化してきているのかと驚きました。

また各社共にいろいろな製品プレゼンテーション、アドバイスのおかげで私たち職員の引き出しが多くできたのは言うまでもありませんでした。

介護現場から直接声を上げなければ決して私達や利用者が望むような製品は出来ないのではないのだろうかと思いました。

今まで私達は現在使用しているものに何の疑問も持たず過ごしてきたこと「あの時Y・Tさんに、この製品があれば痛みからの解放、夜間の安心した睡眠、好きだった針仕事、少しでもY・Tさんの生活は元に戻せたかもしれない」と思うと悔やまれてなりませんでした。

# 新規導入したA社オムツパット

平成26年 7月 新しいオムツ・パットで始めました勿論目標達成の為に始動し始め今までオムツ交換、排泄介助に対して意識していなかった「意識」が出始めてきました。

- ・「自分は正しく装着出来ているのか」という疑問
- ・「この装着で利用者は苦しくないのか」という疑問
- ・「これで本当に漏れがないのか」という疑問

今までオムツやパットの装着に慣れていないわけではないのですが疑問は経験を積んだベテランから新人職員までが同じ意識を持っていました。

そんな声が上がって来たため翌月

平成26年 8月 二度目のアドバイザーによる指導を受ける事になりました

しかし指導後も同様の疑問からの意識は継続されています。

# 今後の課題・取り組み

平成26年 7月から現オムツ・パットとしてから現在に至り問題は100%改善されたわけではありません。

※現状の排泄用具の使用を更に「あたり前の介護」にしない※

その為に・・・。

- ① オムツいじりに対するの対応方法(現場職員からの常時聞き込み提案、実行)
- ② 皮膚トラブルに対するの対応方法
- ③ 個人の現状のADLやQOLに合わせた排泄方法(排泄用具)
- ④ 各オムツメーカーさんとの話し合い(介護現場からのリアルタイムの要望提出、メーカーさんからの提案の検討また実行)

**考え続けなければ職員主体の介護に戻ってしまう。**

# 最後に・・・

- ① 今まで使用している物に対して何も疑問を持っていなかった。

**「何を目標としてそのオムツ(排泄用具)を使用しているのか？」**

介護者が施設内だけで考えるのではなく対外的な環境を構築することで新しい視野が広がり、職員一人一人が個々の利用者「今の状態」にあったものは何かと意識し考えるようになった。

意識する事とは意識付けするものではなく自然と職員一人一人が自分の中で業務に対し常に疑問視しその先の壁を乗り越える事で意識が芽生えるのだと感じた。

- ② 一人ひとりに合わせた排泄ケアとは職員主体の考えではなく利用者主体に考えたもので先ず何よりも利用者に職員が寄り添うための時間構築が必要だと考えた。また介護者が利用者の為を思って対応した事が、利用者との間にすれ違いがあったらその方のQOLは逆に下がっていく一方だと感じた。ADLが同じ状態でも利用者それぞれがどの様に過ごしたいのか？また、どの様な対応を望んでいるのかを常に意識しなければ・・・また**「あたり前の介護」**に戻ってしまうと考える。

**「現状の介護をあたり前の介護」にしない為、オムツを考える事から私達は強く思いました」**

一人ひとりの排泄とは・・・させてしまってる排泄なのかどうかで  
今後大きく変わると思います